

dentsu

世界 64 カ国で

勘定残高の**照合業務標準化**を実現

dentsu

“BlackLine の導入により、手作業を最低限に抑え、ほぼ自動的に照合ができるようになったおかげで、照合後の残高が正しいという確証を持てるようになりました”

ーポール・ゴードン 電通インターナショナル グループファイナンスコントローラー

電通グループに属する電通インターナショナルは、Carat、dentsuX、iProspect、Isobar、Dentsu Mcgarrybowen、Melkle という 6 つの主要事業ブランドを擁し、専門性の高いその他のブランドがそれらの事業を支えている。クライアント企業が優良顧客の獲得と維持・拡大によって有意義な事業発展を達成できるよう支援。世界 145 以上の市場で 45,000 人以上のスペシャリストが活躍し、メディア、カスタマーエクスペリエンス、クリエイティブ分野で業界随一のサービスやソリューションを提供している。

業種

メディア&広告

地域

グローバル

導入時期

2021 年

使用 ERP

50 種類以上

ユーザー数

1,200 人

導入機能

勘定照合、タスク管理

成果

- 時間の節約
- 64 カ国での照合業務の標準化
- 可視性の向上
- 監査の簡素化
- グローバルな視点での業務の把握
- 帳簿に対する信頼性の向上

導入前の課題

電通インターナショナルはクライアント数 11,000 社以上、従業員数 46,000 人以上を擁するグローバル企業であり、決算業務は 64 カ国で 50 種類もの ERP を使用する複雑なものであった。電通グループのファイナンス・コントローラーであるポール・ゴードン氏は次のように語る。「当社には、照合業務のグローバルスタンダードがありませんでした。経理担当者は複数のエクセルファイルを使って、各拠点独自の方法で照合を行っていました」。

また、BlackLine 導入前までは、月次決算の業務内容や進捗状況が可視化されていなかった。「グループ全体として、各国で行っている勘定残高の照合業務の透明性を高めたいと考えました。透明性を高めることで、監査での指摘事項を減らし、リスクを軽減できると考えたのです」（ゴードン氏）

同社の経営陣は、グローバルスタンダードを確立し、自動化を進め、エラーが発生しやすい手作業を廃止する必要性を認識していたが、同社特有の複雑な会計業務に対する技術面での課題については、現実的な懸念があった。

「問題になったのは、複数の国や地域へのシングルインスタンス導入が短期間で実現できるのかという点でした。言語の制約、地域ごとの些細な違い、グループ各社でばらばらな勘定科目などがネックになると考えられていました」

BlackLine を選んだ理由

電通は、決算業務に関連する複数のプラットフォームを調査・検証した結果、BlackLine を選択。2015 年にオーストラリアとマレーシアで勘定照合とタスク管理を導入した。そして、2019 年には、同社のターゲットシステムアーキテクチャ（TSA）およびファイナンス・イングループ・トランスフォーメーション（FIT）に向けたロードマップの一環として、BlackLine をリニューアルした。

「リニューアル時には、オーストラリアと中東・アフリカ諸国をパイロット市場として、勘定照合とタスク管理を試験導入しました。試行期間中にパートナー（アーンスト・アンド・ヤング）の選定や関連ポリシーの改訂の他、Dynamics 365 の API 設計と大規模なトレーニングを実施しました」（ゴードン氏）

この試験導入が大成功を取めたことから、電通は社内に導入・定着化チームを結成。同チームがその後の導入作業を全面的に管理していくことになった。

「BlackLine はパートナーの推薦や審査など、素晴らしいサポートを提供してくれました。おかげで、その後の導入作業は自社の力で比較的スムーズに進めることができました。BlackLine のポータルサイトでは、どんな質問にもすぐに答えてもらえました」（ゴードン氏）

BlackLine の本格的なグループ展開は 2020 年 3 月以降に行われ、プロジェクトでは完全オンラインによるリモート設計とトレーニングセッションが実施された。現在、電通グループ企業では、SAP、DS1、AX、Spectre、Peprika、Marathon、Navision、NetSuite、SAGE、Symys、Advertmind などさまざまな ERP が使用されているが、その後も毎月 5 カ国ずつ BlackLine の導入が進められている。

「現在、64 カ国以上に広がる電通のグループ会社の 91% で、BlackLine が本番環境として稼動しています。2022 年第 1 四半期末までに、BlackLine 使用率は 100%になると予測しています」（ゴードン氏）

導入後の成果

■ 時間の節約

BlackLine を導入するまで、同社の経理担当者はスプレッドシートを使った手作業での決算業務に苦労していた。

「以前は Excel を使って照合作業を行っており、フォーマットも標準化されていませんでした。現在は、BlackLine で 14 万件以上の照合を行っています。照合件数の 80% は自動承認されます。

BlackLine を使って総勘定元帳を整理したことで、全体の照合件数も削減できました。また、インポート用テンプレートですべての未決済項目を統合したことで、手作業による処理を大幅に削減できました」(ゴードン氏)

■ 64 カ国で照合業務を標準化

電通グループの全グループ会社において照合業務のプロセスが統一された。

「当社の経理担当者は現在、標準化された BlackLine のテンプレートを使用しています。地域ごとの違いや例外処理、期日や頻度の変更も BlackLine に設定されたルールによって管理しています」(ゴードン氏)

■ 可視性の向上

BlackLine の導入により、経理担当者や管理者に対して決算業務が完全に可視化された。このことは隠れたエラーを減らし、リスクを軽減し、重複作業を削減する重要なポイントとなった。「BlackLine が持つ高い可視性のおかげで、勘定科目表を整理し、勘定科目の削減や、基幹 ERP でのゼロ残高勘定の照合業務が不要になりました」(ゴードン氏)

■ 監査の簡素化

監査担当者も BlackLine にリモートでアクセスできるため、複雑なファイルの共有やスプレッドシートの印刷が不要になった。

「新型コロナの感染拡大の際には、この機能がリモート下でのレビュープロセスの簡略化に役立ちました」(ゴードン氏)

■ 業務をグローバルな視点で把握

以前は、決算業務をスプレッドシートで行っていたが、現在、電通ではグローバルで 2 万件以上の月次処理を BlackLine で行っている。

「BlackLine のタスク間の依存関係やモジュール横断的な機能を活用することで、月次決算の管理がより効率的に行えるようになりました」(ゴードン氏)

■ 帳簿への信頼性の向上

電通がこれまで行ってきたスプレッドシートによる決算業務では膨大な量の手作業が必要であり、エラー発生リスクも少なくなかった。「BlackLine の導入により、手作業を最低限に抑え、ほぼ自動的に照合ができるようになったおかげで、照合後の残高が正しいという確証を持てるようになりました」(ゴードン氏)

BlackLine に関するお問い合わせはこちら : <https://www.blackline.jp/contact/>

経理お役立ちブログはこちら : <https://www.blackline.jp/blog/>